

牛久：学校周辺に見る自然

第52号 ひたち野うしく小（ひたち野西近隣公園）

2011年11月13日発行

＜ 秋の水辺公園、生きものたちの冬越し準備 ～2. 動物にひっついて種子を運ばせる植物 ＞

11/8、ひたち野うしく小4年生との水辺公園、秋の生きもの観察。今回は、いわゆる「ひっつき虫」。動物の毛皮などにひっついて、種子を運ばせる植物たちです。



ひっつき虫の仲間、皆さんがまっ先に見つけたのがこれでした。センダングサの仲間、水湿地に多いアメリカセンダングサ（キク科）。細かい返しこまかいのついた鋭いトゲするどいが2本出ています。これでイヌなどの動物にひっついて運ばれるのですね。他に多くはないけれど、コセンダングサもありました。

↑ 肥料分の多い、水湿地でよく見られるアメリカセンダングサ（キク科）。 どうして、ひっつくのかな？



↑ 細かく鋭い返しこまかいのついた2本のトゲがあり、これで動物の毛皮などにひっつく。体操服にも簡単にひっつきました。



こちらは、イネ科のチカラシバ。根が発達していることが多く、簡単には引きぬけないほど力があるので「力芝：ちからしば」と名づけられたようです。穂は大きなネコジャラシのようですが、かたく長い「芒：のぎ」で動物の毛にからみ、さらにその芒や果実の柄にも逆さトゲが出ていて、簡単には抜けられないようになっています。

↑ かたく長い芒と、果実の柄には逆さトゲが出ていて、毛にからみついたら、なかなか抜けない。



ひっつき虫は、トゲでひっつくものばかりではありません。イネ科のチヂミザサは、長い「芒：のぎ」からねばねばの液が出て、それで動物にひっついて運ばれます。気がつくとズボンや靴下についていて、なかなか取れず困ったこともありました。

↑ 芒から出る粘液で動物にひっつくチヂミザサ（イネ科）。

粘液を出している写真（中）は、2008. 10. 30つくば市、

イネ科と分かる花の写真（右）は、2008. 9. 25つくば市にて撮影



オオバコ（オオバコ科）もこのタイプ。オオバコの果実はカプセルのようになっていて、踏まれたりすると横に割れ、ふたが取れるように裂けます（こういうのを「蓋果：がいこ」といいます）。ふたが開いてこぼれ落ちた種子は糖分で包まれていて、雨にぬれるとゼリー状になって靴や車のタイヤなどにひっついて運ばれ、あちこちにばらまかれることとなります。車の通った跡をたどるかのようにはオオバコが生えていたり、高い山の上にもオオバコが生えていたりするのは、そのためでしょう。

【理科支援員 宮内】

← カプセルのような果実をもつオオバコ。そのふたが開いてこぼれ落ちる種子は、雨にぬれるとゼリー状になり、靴などにひっついて運ばれる。